

実践研究校の取組

小川高校	6
庄和高校	10
鳩山高校	14
吉川美南高校	18
越谷西特別支援学校	22

平成30年度実践研究校

WIN
PROJECT
WIN

埼玉県立小川高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 590人

教育課程の特色: 少人数制での英語基礎力の養成
: 進学選抜クラスを設置
: リクルートやベネッセと連携

進路: 大学・短大・専門学校等、現役進学率74%以上

小川高校の魅力!

- ① 確かな学力+社会生活力習得を目指した指導
- ② 学習・課外活動・学校行事のバランスのとれた教育
- ③ 進路実現に向けたきめ細やかなサポート体制

アクセス

JR八高線・東武東上線 小川町駅 徒歩3分

埼玉県立庄和高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科 生徒数: 586人

教育課程の特色: 1クラス約33名で、きめ細かな指導
: 1、2年次では、習熟度別授業を実施
: 3年次では、多様な選択科目群を設置

進路: 進学者が8割超え、看護・医療系の進学が増加傾向

庄和高校の魅力!

- ① 多様な進路希望に対応した手厚い指導
- ② 運動部・文化部とも充実
- ③ 小さな成功体験を積み重ね自信が持てる環境

アクセス

東武野田線 南桜井駅 バス5分

埼玉県立鳩山高等学校



学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通科・情報管理科 生徒数: 369人

教育課程の特色: 1年生は少人数学級編成
: 数学・英語は2クラス3展開
: 普通科も「情報処理」を2年次に学習

進路: 進路決定率100% (大学・専門学校・就職等)

鳩山高校の魅力!

- ① 学科を超えた豊かな学び
- ② 地域の発展に貢献するリーダーの育成
- ③ 実習的・実務的・実践的な学習を重視

アクセス

東武東上線 高坂駅 鳩山ニュータウン行バス8分

埼玉県立越谷西特別支援学校



学校基本情報

種別: 知的障害 学部: 小・中・高等部 生徒数: 232人

教育課程の特色: 個別的教育支援計画の作成
: 外部専門家を活用したきめ細かな指導
: タブレット等のICT機器を活用した授業

進路: 一般就労が約2割、福祉施設利用が約8割

越谷西特別支援学校の魅力!

- ① 自立活動を充実し、児童生徒のニーズに応える指導
- ② 小・中・高等部の段階に応じ、一貫性のある指導
- ③ 高等部での現場実習等、ニーズに応じた進路指導

アクセス

東武スカイツリーライン 越谷駅 バス・徒歩20分

埼玉県立吉川美南高等学校



学校基本情報

課程: 全日制・I部定時制 学科: 総合学科 生徒数: 544人

教育課程の特色: 1年次より少人数学級を編成
: 商業系の選択科目を設置
: 英語は少人数、数学は習熟度別授業

進路: 就職から専門学校・大学進学まで多様に対応

吉川美南高校の魅力!

- ① 生徒の可能性を引き出し、伸ばす
- ② アクティブラーニングなどを採り入れた魅力ある授業
- ③ 授業・補習・家庭学習の「学力向上のスパイラル」

アクセス

JR武蔵野線 吉川美南駅 徒歩12分

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立小川高等学校

テーマ 「小川高校『ふるさと創生プロジェクト』」

1 教育効果・目的等

・はじめに

本校が所在する小川町は「武蔵の小京都」と呼ばれている。周囲を緑豊かな外秩父の山々に囲まれ、市街地の中央には槻川が流れる山容水態の明媚な町である。平成26年にユネスコ無形文化遺産として登録された「細川紙」のほか、絹、建具、酒造などの伝統産業が息づく一方で、近年では本田技研工業埼玉製作所の小川エンジン工場が稼働を開始し、世界に向けて最先端の技術供給をなしている。

このような魅力あふれる町と、本年度創立90周年を迎えた伝統校である本校が連携して教育活動に取り組むべく、本年4月から「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」をスタートさせた。

・研究の基本方針

- (1) 生徒が町の様々な主要地域行事に運営側として参加する。
- (2) 生徒に地元の魅力を再発見させるとともに、地域の課題にも関心を持たせ、課題解決について検討させる。
- (3) 事業の中での取り組みは逐一HPに掲載し、地域に発信していく。

・研究の構想

本校の生徒数と小川町の人口の推移は正比例している。過去20年で見ると、生徒数も人口も4分の3まで減少し、この推移に歯止めをかける具体的な要素は今のところない。

そこで、伝統校である本校が地域の中核となって町を盛り立てる、町に盛り立てていただくという関係を構築し、人口減少や文化・伝統の継承などの地域の課題をともに考えていこうと創設したのが「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」である。

これには町の行政との連携が不可欠であるため、小川町と「包括連携協定」を締結し、地域行事等の運営を一緒に行いながら研究を進めていくこととした。

・教育効果

(1) 生徒の意識の変化

地域の人々と協働しながら町の行事に取り組むことにより、生徒に地域への愛着と誇りが生まれ、地域貢献への意欲が向上する。

(2) 生徒の資質の変化

地域行事に企画段階から関わることにより、生徒に課題意識が芽生えるとともに、主体性や探究心が向上する。

(3) 学校教育の在り方の変化

学校と地域がともに生徒を育てていく体制を整備することにより、これからの予測不能な時代に求められる人材育成に向け、より効果的な生きた教材を提供することができる。

・目的

地域創生への積極的な取組によって、生徒の意識や資質を向上させ、一人ひとりに望ましい未来を切り開く力を身に付けさせることが、本研究の目的である。

2 実践内容



「小川高校『ふるさと創生』プロジェクト」全体図

(1) 地域行事の活性化のための活動

地域には様々な魅力的な行事がある。町を活性化するには、それらの行事を町内はもちろん町外にも積極的にアピールし、町に注目を集める必要がある。

例えば、小川町商工会青年部が計画した「スカイランタンの打ち上げ」では、本校生徒が協力することでランタンの数を大幅に増やすことが可能となりマスコミ等にも取り上げられることとなった。

また、毎年の恒例行事である「小川和紙マラソン」では、本年度から司会進行と実況を本校の放送部が担当し、大会全体に若々しい雰囲気が出た。



「スカイランタンの打ち上げ」



「小川和紙マラソン大会」

(2) 地域の課題解決のための活動

地域には、その地域に固有の課題がある。その課題に取り組ませることは、生徒がこれからの未来を切り開く能力を育むことに資するものである。

小川町の伝統工芸は和紙漉きであり町で作られる「細川紙」はユネスコ無形文化遺産である。しかし、これを普及し産業として成立させなければ後継者は育たずやがて伝統的技術は潰えてしまう。そこで本校の書道部は小川町から細川紙を提供していただき、それを使用した作品を「小川町和紙フェスティバル」に出品することから、細川紙の普及に取り組み始めた。

また、高齢化に伴った、「オレオレ詐欺」等の犯罪の増加も地域が抱える課題の一つである。そこで地域に流れる防災防犯無線や青色パトロールカーのアナウンスには放送部の生徒が声を吹き込んだ。機械的な話し方ではなく、孫が祖父母を心配するような言葉遣いにより、町民の注意を引き付けることができている。



「小川和紙フェスティバル」



「小川警察署と協働した防犯意識啓もう活動」

(3) 地域との交流に関する活動

地域との交流は、生徒にとって地域への愛着と理解を深める絶好のきっかけとなる。

小川小学校下里分校は平成23年から廃校となっていたが、今年からカフェとしてオープンした。そのメニューの開発を本校の生活美学部（家庭科部）が中心となって行った。半年間かけて創作した5つの料理は地元食材を使用しており、地域から好評を博している。

また、本校生徒有志30名が地元の小学校と交流を図った。午前中は持久走大会の補助を行い、午後はグループに分かれてそれぞれ授業の手伝いをした。ここで本校生徒と触れ合った小学生たちが、高校生となってこの取組に参加し、保護者となってこの取組を見守るところまで続けていく計画である。



「メニュー開発した分校カフェ」



「小川小学校との交流事業」

その他、「嵐山史跡の博物館ボランティアティーチャー」「介護施設での音楽部出前演奏会」「地元音楽会での司会進行」など、多くの地域行事に関わり、新しい発想と初々しい雰囲気づくりで町の活性化に貢献することができた。

3 実践の成果

(1) 生徒についての成果

プロジェクトにおける様々な経験を通し、参加生徒は地域課題を意識するようになるとともに、主体性や探究心、課題解決に臨む姿勢が身に付いた。

【平成30年度 県立学校ほっとニュース】より 生徒の感想】

試作の段階では、思った通りにメニューが作れず、「現実には甘くないんだ」とか「お店で並ぶような商品はそう簡単には作れないんだ」と知りました。しかし、カフェに実際立ってみて、自分で考えた料理を商品化できたこと、実際にお客様に食べてもらえることが何よりも嬉しかったです。

(2) 学校についての成果

地域行政と組織的につながることで、校内の教育活動においても人的・物的支援を受けることができたとともに、教員にも、学校だけでなく地域全体が学びの場であるという意識が波及している。

【平成30年度 地域と連携した授業】

- ・総合的な学習の時間「くらしと科学」 和紙漉き体験
- ・総合的な学習の時間「総合歴史研究」 小川町の史跡についてのフィールドワーク
- ・選択科目「発達と保育」 小川保育園の幼児との交流

(3) 地域についての成果

高校生が企画段階から参画することで、地域行事に新風を吹き込み、町の内外に、世代を超えて町の魅力をアピールすることができた。

【平成30年度 小川町広報雑誌「おがわ」】

- ・10月号トピック「小川町食の魅力PR事業withおが高生」
- ・11月号トピック「小川和紙フェスティバル開催」

4 課題と今後の展望

(1) 参加生徒数について

現在は一部の生徒による取組となっている。今後は、生徒全員が取り組めるような仕組みを考案していく。

(2) 課題発見について

現在取り扱っている課題は表面的な課題のみである。町の行政との緊密な関係を生かし、生徒にさらに掘り下げた地域課題を発見させ、議論を重ねながら解決策を見出すような取組を加える。次年度は小川町主催「小川町まち・ひと・しごと創生総合戦略推進会議」における「若者未来会議」(年4回)に生徒を派遣し、地域課題についての考えを深めさせる予定である。

(3) 学校の在り方について

町で唯一の高校である本校が、町の中核校としてどう機能していくべきかさらに検討を重ねる。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立庄和高等学校

テーマ 庄和の未来を共に創る「地域創生」物語

1 教育効果・目的等

- ・生徒が主体的に課題を見つけ、解決策を考えることで実社会に役立つ力を育む。
- ・学校外資源を活用することにより、地域との連携を深める。
- ・教員が案を出し生徒を誘導することなく、企画を進めていった。これは担当教員間で共通理解のもと、生徒の主体性・協働性の成長を期待し進めていった。
- ・グループが9班に分かれたため、担当教諭3名を、3班ずつ指導に当てた。もちろん生徒主導で指導に当たった。
- ・中間報告会を数回実施し、担当教諭のほか管理職（校長・教頭）が参観し、各班に質問を浴びせるなどして、疑問を解決する方策を取っていった。

2 実践内容

(1) 活動の流れ

ア 課題の設定

- ・有志参加35名(2年8名、3年27名)が参加し、9班に分かれ活動を実施(4月)。
- ・庄和商工会へ伺い、庄和地区の課題等のレクチャーを受け、意見交換を行う(5月)。
- ・各班がそれぞれ課題を設定し、調査研究に取り組む(6月以降)。

<各班の課題>

- 1班：「庄和地域 DE 庄和高生が農業奉仕」
- 2班：「庄和マップを作ろう！」
- 3班：「事故を減らすためには」
- 4班：「春日部の在来大豆を知ろう!!!」
- 5班：「桜台商店街を活性化させる」
- 6班：「庄和町活性化計画！」
- 7班：「庄和高校文化祭&庄和商店街の発展」
- 8班：「サイクルステーションを作ろう」
- 9班：「庄和を活気づけよう」



庄和商工会との課題共有会

- ・庄和高校生の課題設定のポイント
①南桜井駅前商店街の活性化 ②住みよい街づくり ③庄和の知名度を上げる

イ 中間報告

- ・9班が活動状況を発表し、状況の確認とこれからの活動のヒントとした(7月)。
- ・夏休みの活動計画を立て、中間報告として夏休み中にポスター作成を行う(7月)。
- ・庄和高校文化祭で9班のポスターセッションを行う(9月)。

ウ 成果発表会

- ・教育長、庄和商工会、かすかべ未来研究所へ各班の成果を発表する(11・12月)。

(2) 各班の成果

- ・文化祭で地元商店の出店や商品の販売を行った。《1・7班》
- ・春日部在来大豆の大豆粉を使ったバナナマフィンなどを作成した。《4班》
- ・南桜井駅周辺にある桜台商店街を紹介するためのマップを作成した。《5班》
- ・文化祭で商工会の協力でバザーを実施した。《5班》
- ・各班の成果や庄和地域のことをHPやSNSで発信した。《2・5・9班》



文化祭での出店の様子



春日部在来大豆の大豆粉を使ったバナナマフィン



桜台商店街紹介マップ



文化祭でのバザーの様子



作成したホームページ

3 実践の成果

(1) 実践を通して得られたもの（生徒の感想）

- ・地域の問題点や改善点が見え、仲間と協力しながら考え、行動することができた。他人の意見と自分の意見を共有しながら考えを深めることができた。これから社会に出るにつれて、人と関わる機会や人前で発表する機会が間違いなく増えると思う。その意味でこのプロジェクトに参加して良かった。この経験を将来に生かしたい。
- ・街の人にインタビューしている時、積極的に話しかけることができ、社会性が磨かれたと感じた。また、WIN-WINプロジェクトを通して、普段過ごしている地域のことを見つめ直すことができ、様々な視点も持つことができた。私自身が成長するきっかけとなった。
- ・地域についての関心が高まり、自分の住んでいる地域のことをより深く理解することができた。私はこの春、地域密着型の職場に就職するので、このプロジェクトの経験を生かしていきたい。
- ・春日部在来大豆を調べ、詳しく知ることができたと同時に、地域の皆さまと交流を深めることができてよかった。商品開発では、仲間と考えを出し合い、互いに高めあうことができた。考えたレシピを通じて、大豆を広めることに貢献できれば嬉しい。
- ・WIN-WINプロジェクトを通して、特に印象に残っているのは、私たちのテーマである庄和の商店街についてである。調べるにあたって、地元の人々やお店の人の優しさに触れ、もっともっと商店街のことをいろいろな人に知ってほしいと思った。この活動は後輩にも引き継いでもらいたい。
- ・高校生活の最後に何かボランティアのようなことに参加したいと考えており、このプロジェクトに参加した。お店と交渉をし、準備をすることを初めて一から自分たちで行ったので、相手様に迷惑を掛けてしまったことも多々あった。しかし、今回の経験は、社会に出て会社に勤めると何かしらの部署ではこのような交渉をすると思うので、大人がやっていることとほぼ同じことを自分たちのみでやり遂げることができたのは、とても嬉しく、自信になった。そして、大切な経験をさせてくれたので、交渉をする力（交渉力）を学ぶと同時に、他のことにもチャレンジしたいと強く思った。
- ・問題を見つけるところから、解決のためにどうしたらよいか、他人に話しかけたり、仲間に相談したり、調べてまとめたり、頑張って発表までたどり着けて達成感があってよかった。
- ・サイクルステーションの設置に際して、夏休みに実際に自分たちで空き地を探し、市役所に提案してみたところ、私有地と判明した。先に市役所に行って、民地を教えてもらい、その中から探すのが最適な方法であったと痛感した。でも、自分たちの足で探したことは無駄ではないと感じている。

(2) 学校のメリットや地域のメリット

ア 学校のメリット

- ・様々な課題を解決しようとする中で生徒が成長できた。
- ・生徒も学校も地域を知ることができたことと地域との関係が深まった。

イ 地域のメリット

- ・高校生という若い世代に、地域を知ってもらうことができた。

4 課題と今後の展望

(1) 課題

ア 課題の把握

- ・アンケートや地域への聞き取りなどを実施する場合はある程度の数を実施する必要がある。
- ・生徒自身の思い込みにならない注意が必要。

イ 解決する課題の設定

- ・課題の設定が広くなりすぎると活動の焦点がぼやけてしまう。
- ・「こうすればこうなる」を発想させて、課題解決の手だてを考えさせる。
- ・すべて生徒の意見やアイデアを尊重し探究活動を進めたが、探究する活動内容をもう少し教員が絞って提示するなどの支援をした方がよかったと感じている。

ウ 教員の関わり方

- ・私たち教員も教わったことのない探究活動を実施するにあたって、研修等が必要であったと感じている。生徒にも「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」など、適切な資料等を提供することができず、口頭だけで指導しており、十分な探究活動の支援ができなかったと反省している。この経験を今後につなげ、自発的な研修と教員間の情報・指導共有を大事にしながら、探究活動を進めていきたい。

エ 地域との連携

- ・生徒がもっと積極的に地域と関わる必要がある。高校生が動く地域の方々が親身になって対応してくれる。

(2) 今後の展望

- ・庄和高校では平成30年度より「総合的な探究活動の日」を年5日間（学期末試験後）設定し、学校全体で探究活動に取り組んでいる。WIN-WINプロジェクトも同時並行した。
1 学年のテーマは「埼玉の魅力を発信しよう！」連携先（カタリバ）
2 学年は「国際理解・台湾について現地で検証しよう！」連携先（㈱教育と探究社）
3 学年は「地域創生で地元を活性化しよう！」連携先（かすかべ未来研究所）
その中で、グループでの意見をブレインストーミング形式で出し合い、調査研究等を進めた。最後はパソコン台数に制限があるため、紙形式のプレゼン発表を行った。
- ・来年度も引き続き、学校全体で探究活動に取り組んでいく。テーマは学年固定とし、毎年違ったテーマで生徒は探究活動を進めていく予定である。
- ・3 学年では「地域創生」をテーマにしており、WIN-WIN プロジェクトの趣旨も校内で継続できると考えている。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立鳩山高等学校

テーマ ハトミライ☆プロジェクト

1 教育効果・目的等

本校は創立36周年を迎えた普通科・情報管理科の2学科を併設した鳩山町の支援のもとに設立された高校である。地域との連携も以前から進んでおり、小学校との交流事業や地域行事への運営補助や出演、清掃活動等を実施して来た。

平成29年度にこれまで年に2回実施していた福島への「東日本震災復興ボランティア」を年1回とし、その経験を活かして地域の活性化を目指したボランティア活動について生徒会が検討を開始した。当時の生徒会長が地域の超高齢化・人口減少が進む現状から「鳩山町を人のたくさん集まる町にしたい」という思いを抱き、「さくらの名所」にすることを考えた。生徒会本部役員の賛同を得て、11月に鳩山町教育委員会が主催する意見発表会で「ハトミライ☆プロジェクト～30年後に地元鳩山を桜の名所へ～」を提案し、鳩山町の協力をいただきながら、さくらの植樹を実現した。この取組により、生徒は地域の課題を理解するとともに解決するために方策を考え、提案し、実践することにより、自らの成長を実感した。

この様子からこの取組を単年度で終わらせずに継続し、さらに地域の方と協働で連携を広げようと考え、「学校地域WIN-WINプロジェクト」への参加を決定した。多世代の方との交流を通して、困難な課題にも仲間とともに知恵を絞り、解決に向けて進む力を身につけることを目的とする。また、自らが考えたことが実現することにより生徒が自己肯定感を高めることも期待している。

本プロジェクトは、生徒会本部・生徒会部職員が担い、生徒会部主任が中心となり、組織として取り組んでいる。生徒に自分たちで考え、主体的な活動になるよう意識しながら進めて来た。

2 実践内容

(1) ハトミライ☆プロジェクト 2018

鳩山町と共催でふくしまサクラモリプロジェクトから提供を受けた「ふくしまさくら」の植樹を実施した。「はとやま」・「鳩山高校」・「ふくしま」が結びつき、「たくさん笑顔を咲かせたい」、「地域活性化につなげたい」という生徒の思いを実現した。

ア 日時 平成30年3月28日(水) 午前10時～午前11時30分

イ 場所 鳩山町農村公園

ウ 参加者 鳩山町職員・本校生徒・職員・地域住民 計90名

エ 内容

(ア) 趣旨説明

(イ) 記念式典

(ウ) 記念植樹

(エ) 記念撮影

オ その他

広報活動に力を入れ、鳩山町の広報誌「広報はとやま3月号」に掲載するとともに生徒が作成した案内を



〔 さくらの植樹 〕

町内小・中学校の協力を得て、児童・生徒に配布していただいた。缶バッチの作成や風船の配布、鳩山町のゆるキャラ「は〜とん」を招くなど小さな子どもの参加も意識した。

また、客土や掘穴等には鳩山町から御紹介いただいた地域の事業所を利用し、地域とのつながりを重要視した。

なお、ハトミライ☆プロジェクト 2019 については、平成 31 年 3 月 27 日（水）に実施することが決定しており、今年度は、ふくしまサクラモリプロジェクトから提供いただく「ヤマザクラ」9 本を植樹する予定で進めている。

(2) 下草狩り・落ち葉拾い

生徒会がこれまで実施して来た朝の清掃を農村公園まで広げ、定期的に年間を通じて、除草作業や落ち葉の清掃作業を行なった。計画段階で課題としてあげられていた植樹後の管理についても取り組んでいる。

(3) 現地視察・打ち合わせ

ア 第 1 回 打ち合わせ

6 月 11 日（月）、生徒 2 名と職員 2 名とで鳩山町役場政策財政課を訪問し、今年度のハトミライ☆プロジェクトの方向性について協議をした。NPO 法人「里山環境プロジェクト・はとやま」の方から助言をいただきながら、石坂の森を植樹の候補地として決定し、現地視察の日程調整をすることで合意した。また、同法人から生態系を考慮し、さくらの品種は「ヤマザクラ」が適切であるとのアドバイスをいただいた。

イ 第 2 回 打ち合わせ・現地視察

8 月 2 日（木）、生徒 4 名と職員 2 名、鳩山町職員 4 名とが同 NPO 法人の方から「石坂の森」について説明を受けた。また、植樹場所について意見交換をし、多くの方にさくらを見ていただける活動広場と森への入口付近に植える方向で関係団体の許可を得ることとした。また、植樹の日程について候補日を示し、検討依頼をした。夏に石坂の森の下草刈りを予定していたが、暑さのため、計画を中止した。



〔 石坂の森 現地視察 〕

ウ 第 3 回 現地視察（市民の森 モリ×モリウォーキングへの参加）

11 月 17 日（土）、生徒 17 名・職員 3 名が参加し、地域の方とともにイベントへ参加した。森を歩きながらポイントでは木の実やつたなどの森の素材を使用したリース等を製作した。終了後には地域の食材を使用した豚汁・おにぎりをいただき、地域の方との交流を深めた。

翌週、生徒会役員会で情報を整理し、生徒の代表者から鳩山町職員に電話連絡し、植樹の日程等について希望を伝えた。

エ 第 4 回 現地視察

2 月 5 日（火）に生徒 12 名・職員 6 名が参加し、鳩山町職員 4 名、同法人の方とともに実際に植樹する場所を確認した。生徒が持参したスコップで穴を掘ろうとしたところ、歯が立たない状況であった。

また、以前に植樹したヤマザクラがあまり育っていないこともわかった。深くまで掘るために業者に依頼することや生態系を考慮しながら培養土を使用することも検討課題としてあ



〔 モリ×モリウォーキング 現地視察 〕

げられた。また、その費用についても鳩山町と本校とが互いに検討することで終了した。

(4) 広報活動

生徒が植樹の案内の作成や「さくらの名所マップ」に2月現在、取り組んでいる。3月初めに各家庭に配布し、地域の方に配布する予定である。

(5) 植樹以外の新たな取組み

ア オーガニックサラダを楽しむランチ

7月29日(日)に鳩山町コミュニティ・マルシェで実施し、(株)元氣パートナーズの運営補助として、家庭部4名・職員2名が参加をした。地域の野菜を地域の方に知っていただくことや鳩山への就農者への支援を目的として協力をし、生徒が地域を理解し、地域の方と触れあう機会となった。

イ オーガニックコットン栽培

東日本震災復興ボランティアで連携をしている福島県いわき市のNPO法人ザ・ピープルから3月にオーガニックコットンの種を送付いただいた。生徒会で検討し、育てることとした。(株)元氣パートナーズから鳩山町奥田の農地を無償で提供いただき、栽培方法等の助言をいただきながら、5月に種をまき、10月に収穫をした。また、収穫した約10kgのコットンと同法人に届け、福島で有効活用していただくこととした。自分たちの活動が人の役に立っていることを実感するとともに地域の方の協力で実現できたことを強く感じた。なお、この取組は「埼玉県キャリア教育実践アワード2019」で優秀賞をいただいている。

ウ みんなのマルシェ

11月14日(水)、鳩山町コミュニティ・マルシェで本校主催により実施した。県民の日でもある同日に多世代の交流をねらいとして、生徒が企画・運営をした。

家庭部6名はみんなの食堂「スモールピジョン」を営業した。1学期から定食のメニューを考え、試食品を校内で作し、地域で採れた野菜を活用したメニューを考えて、調理・販売した。様々なトラブルに直面し、試行錯誤をしながら接客をした経験や地域の方からの温かいことばをかけていただいたことにより生徒は達成感を得るとともにその後の活動意欲を向上させた。

また、課外授業「キャリア・サポート」選択者6名は、みんなのカフェ「鳩六堂」を営業した。自分の役割を確認しながら何度も本校の教員を対象に校内で模擬実習を重ね、実施の準備をした。緊張をしながらも来客へ対応をし、それぞれが個々に掲げた目標を達成したことにより成長を実感している。

当日は幼児や児童から高齢者まで多世代の地域の方が100名ほど来場し、生徒と交流をしながら飲食を楽しんでいた。

エ 地域連携に関する協定書 締結式

11月22日(木)に鳩山町役場において、「鳩山町・埼玉県立鳩山高等学校 地域連携に関する協定書」を締結した。鳩山町は高齢化が進む中、高校生など若い世代による町の活性化につなげるため、これまでの連携をさらに推進していくことで合意をしている。今後も互いにWIN-WINの関係を築いていくことが確認できた。

3 実践の成果 (植樹後の感想から抜粋)

(1) 生徒の感想から

- ・ 今後も町や地域の人たちと一緒にあって、桜の輪を広げていきたい。
- ・ 地域との直接的な結びつきが弱いと思っていた。福島へのボランティアの経験を活かす

ことができた。

- ・ 桜は形に残る。僕らが最初の未来への架け橋になり、卒業後も鳩高の伝統として後輩に受け継いでいってほしい。
- ・ 今回のプロジェクトとつなげ、町と高校がいっしょになって町づくりを目指していきたい。

(2) 地域の方の感想から

- ・ 鳩山を桜の名所にとというのはありがたい提案。30年後、実現するように望んでいる。
- ・ 鳩山に福島の桜が3本になりました。大きくなってもいつまでも咲き誇り、町の人と福島の人を笑顔にしてくれますように。
- ・ 鳩山と子供たちの成長を祈っています。大きく育ったらこの木の下で花見をしたい。30年後が楽しみです。
- ・ すばらしいイベントですね。10年・100年経ってもこの鳩山が笑顔であってほしい。
- ・ 鳩山のために頑張っている鳩高生に感謝しています。毎年続くことを希望します。

(3) 教職員の感想から

- ・ 生徒が自ら企画したことが形になったことで生徒は達成感を得ることができた。また、掲げたことを実現する困難さを学んだ。一つのことを達成するためには、多くの方に協力をしていただく必要があることや植樹に参加していただいた方のメッセージからそれぞれの人の「想い」を感じることができたと思う。メッセージボードにより「見える化」ができたことも効果的だった。
- ・ 鳩山での体験活動により、地域の課題を身近なものとして捉え、その課題を解決する能力を地域の方に支援いただきながら養うことができると感じる。
- ・ 高齢化率が48%を超える少子高齢化が進む地域をクローズアップすることにより、今後、多くの地域が抱える課題に高校の視点・地域の視点から先進的に取り組むことができ、本校が目指す「実学」につながっている。
- ・ 地域住民と本校の生徒・職員の距離が縮まり、他の教育活動にも波及することが期待できる。

4 課題と今後の展望

(1) 課題

「さくらを植える」と決定してから場所や本数について協議を重ねたが、土地の所有者や環境の問題、植えた後の管理等、取り組み前に考えていた以上に課題が山積した。学校では解決できない課題も多く、鳩山町の御協力があり、実現できた。当初は10本程度を植え、徐々に増やしていき、桜並木にすることを想定していたが、ようやく1本だけではあるが植えることができた。1本でも生徒にとっては大きな1歩だった。

生徒が学校の外部の方と交渉をするのに先立ち、生徒に指導をしなければならないことが多々あった。また、生徒では前に進めることができない場面も多く、教員がどこまで支援すべきか考えながら進めた。さらに生徒の主体性を育てていきたい。

(2) 今後の展開

現在、作成中のマップができ上がったら、動画等でのPR等も含め、本校の活動をさらに多くの方に知っていただきたい。30年後に鳩山がさくらの名所となるようさくらの植樹を地域の活動として定着させたいと考えている。また、今後も生徒がやってみたいと思ったことを実現できるよう教員が支援し、積極的に学校と地域が互いに有益となる活動を推進したい。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立吉川美南高等学校

テーマ 芸術が栄える街づくり～地域と吉川美南高校が奏でる芸術創造～

1 教育効果・目的等

(1) 教育効果・目的

地域の芸術系イベントや街づくりに参加するだけでなく、イベント等の企画・運営までコミットすることにより、異年齢交流（特に大人との交流）を通じた、生徒の認知の多面化や多角化を図ることができる。地域においては、生徒とともに行うフィールドワークを通じて、より良い学校づくりやより良い社会づくりに貢献できる。

(2) 展開方法・具体的な活動

吉川美南高校の生徒会本部と芸術系部活動（吹奏楽部・美術部・書道部・放送部・軽音楽部・創作研究部・家庭科部）が吉川市における芸術系のイベント（ジャズナイト、ロックフェスティバル、吉川市民文化祭、吉川市民まつり、「エフエムこしがや」への出演など）の参加に留まらず、企画・運営にまでコミットする。特に、「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、吉川市とともに芸術の街づくりに参画する。

(3) 効果を高めるための事前・事後学習の内容

事前学習として、吉川市長を招聘し、芸術の街づくりに関する講演会を行う。事後学習として、参加生徒対象のアンケート調査（事前も実施）を行い、自己肯定感や自己醸成感がどのように変容したかについて分析・評価・改善を行う。

(4) 学校のメリット・地域のメリット

学校としては地域資源の有効活用、地域としては学校づくりや社会づくりへの貢献というメリットがある。

2 実践内容

WIN-WINプロジェクトが発足して間もない5/31(木)、本校の事業に向けて参加者の意識合わせをするため、吉川市長の中原氏を招聘し「スタートアップ講演会」を開催した。その中で、中原市長は「写真部なら写真を撮るのは当たり前。その先で何ができるかを考えてみよう。」とお話しされ、自分の強みや得意をつかって社会貢献することを「もう一歩先へ」というメッセージに乗せて生徒に助言された。地域と吉川美南高校、そして生徒会本部と芸術系部活動の絆を深める効果的な講演会であった。

また、この講演の中で中原市長は、吉川市名産の”なまず”について触れながら、「吉川美南高校も、なまず料理やろうよ!」と発言された。この一言が、後々、新たな取組を生み出すことになる。



中原市長の講演



講演(全景)



中原市長の言葉を受け発言する生徒

ところで、本校の事業は、大きく2つの柱を持つ。それぞれの大柱の中で、以下のとおりいくつかの取組を実施した。

(1) 第1の柱「継続・コミット」

吉川市における芸術系のイベント（ジャズナイト、ロックフェスティバル、吉川市民文

化祭、吉川市民まつり、「エフエムこしがや」への出演など)の参加(継続)にとどまらずに、企画・運営にまでコミット(関与)する。

① 「ジャズナイト」のポスターを制作

美術部は、吉川市商工会青年部の依頼を受けて、9/8(土)に開催された「ジャズナイト」のポスターを制作した。

② 「埼葛人権を考える集い」の大型人権看板のためのポスターを制作

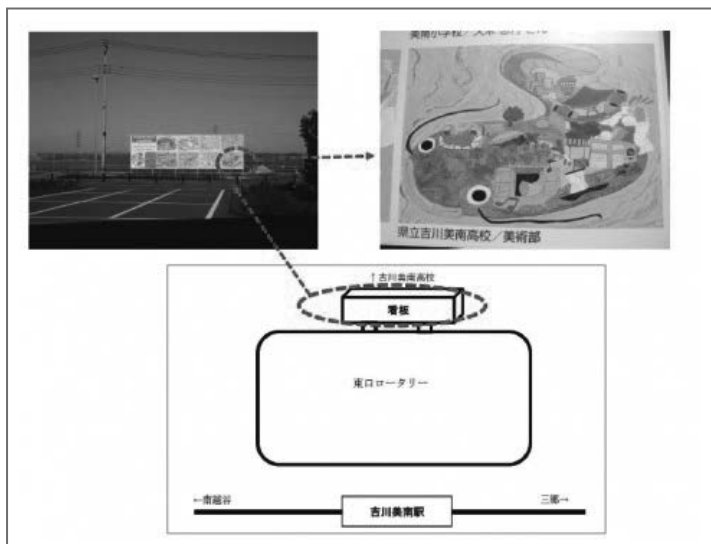
創作研究部が、吉川市教育委員会の依頼を受けて、「第27回埼葛人権を考える集い」の大型人権看板のためのポスターを制作した。このポスターは、10/11(木)に、春日部駅から会場の春日部市民文化会館までの道のりに掲示された。

③ 「まちづくりコンセプト」の看板絵画の制作

美術部が、吉川市(都市整備部吉川美南駅周辺地域整備課)の依頼を受けて、吉川美南駅東口ロータリーの看板に「まちづくりコンセプト」を表現した絵画を提供した。この絵画は、10/26(金)に吉川美南駅東口に設置された。



「ジャズナイト」ポスター(美術部)



「まちづくりコンセプト」看板絵画(美術部)



「人権看板」ポスター(創作研究部)

④ 芸術系部活動が吉川市民文化祭へ参加・出展

11/3(土)・4(日)、芸術系部活動4部(軽音楽部・書道部・美術部・放送部)が吉川市民文化祭に参加・出展した。

開会式前のオープニングでは、軽音楽部が演奏を披露し、会場のシニアの方々に好評を得た。美術部と書道部は作品を展示し、小中学生や家族から称賛を得た。そして、放送部は、ステージ発表の進行を2日間に渡って務め、日頃の練習の成果を発揮した。



オープニング前の演奏(軽音楽部)



作品展示(書道部・美術部)



ステージ進行(放送部)

- ⑤ 放送部・生徒会本部が「吉川市民まつり」に参加
11/18(日)、放送部と生徒会本部が「吉川市民まつり」に参加した。吉川市の行事においては、放送部が司会進行を務めることは定番となっている。

一方、生徒会本部は、吉川ロータリークラブの支援により韓国へ短期留学する生徒とともに、同クラブの指導のもと、募金活動の募金と焼きそば販売をして得た売り上げを、同クラブを通じてポリオ撲滅に寄付をした。



ポリオ撲滅キャンペーン(生徒会)

(2) 第2の柱「創造・チャレンジ」

「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」が示すポイント「駅前ゾーンに文化的施設の誘致を目指し、吉川市の文化芸術拠点とします。」について、吉川市とともに芸術の街の創造にチャレンジする。

① 「なまず料理教室 in 吉川美南高校」の開催

10/2(火)に、「なまず料理教室 in 吉川美南高校」を開催した。これは、当初計画にはなかったが、スタートアップ講演会における中原市長の発言を受けて企画・実施した。

WIN-WINプロジェクトのような実践型の取組には、学習のPDCAサイクルをクルクル廻しながら、「走りながら考える」・「評価・改善を加えながら計画すら見直す」という視点を持ち、学びの質をブラッシュアップしていくことが大切である。



なまず料理教室(家庭科部)

ところで、吉川市名産「なまず料理」と言えば、食文化、つまり芸術である。これは第2の柱「創造・チャレンジ」にマッチした食文化という芸術創造の取組である。

ここで、当日の校長挨拶を掲載する。

今回の取組には、本当に大勢の方がかかわっています。
まず、埼玉県教育委員会は「学校地域WIN-WINプロジェクト」の主催者です。
そして、今回は、吉川美南高校家庭科部がWIN-WINデビューします。
吉川美南高校のパートナーは吉川市です。今日は、吉川市の中原市長もいらしています。中原市長の一言が、この料理教室の開催につながりました。
なまず料理の指導者は吉川ロータリークラブがご紹介くださいました、吉川市内の萬万亭とフードカフェレガメの料理人さんです。
また、本日は、本校のPTA・後援会の合同研修会も兼ねています。保護者の方々も参加されているのはそういう理由からです。
なまず料理のアドバイスをくださった北谷小学校の校長先生も参加されています。
本校にとっては、このような大勢の地域の教育力を得られるとともに、吉川市にとっては、なまず料理のPRや高校生地域の活躍を得られる、まさにWIN-WINの取組になればと思っています。

② 高校生アイデア創出会議の開催

10/23(火)、「吉川美南駅東口周辺地区土地区画整理事業」を踏まえて「高校生によるアイデア創出会議」を実施した。

各グループが発想支援ソフト「IdeaFlagment2」を使用し、パソコン上でアイデアを出し合いながらグループ化し、さらなるアイデアを融合・創造した。

各グループからは「まずは安心安全な街づくりが必要」、「老人の憩いの場が必要」、「運動や娯楽でお腹を空かせて飲食店に呼び込むストーリー」、



高校生によるアイデア創出会議

「お城を建ててそのコンセプトに沿った街づくり」など、若者らしい柔軟な発想がたくさん飛び出した。

最後に、各グループが発表を行い、吉川市役所担当課からアドバイスをいただいた。生徒からは「皆で意見を出し合えば、自分が考えられないこともたくさん考えられることがわかった。」「断片化されたアイデアをもっと関連性を考えてつなげればよかった。」「時間が制限された中でたくさんのアイデアを出すことは大変だった。」「パソコン上で意見を出し合う方法は新鮮で楽しかった。」などの感想が聞かれた。

3 実践の成果

(1) 「事前・事後アンケート」から

スタートアップ講演会（5/31・木）を受講した生徒に対して、取組前（6月）と取組後（翌1月）にアンケートを実施した。

回答した41名のうち、設問「吉川美南駅東口周辺地区土地地区画整理事業についてどれくらい知っているか」について31ポイント、「整理事業が示すポイント『駅前ゾーンを文化芸術拠点とします』についてどれくらい知っているか」について43ポイントの上昇（4点法で回答）があった。一方、「地域交流に興味があるか」や「本取組みに興味があるか」、「本取組みへの貢献意欲はあるか」については、有意な増減は見られなかった。今後、生徒の本取組みへの興味・関心をリサーチしながら、取組内容を精査する必要がある。

(2) 「学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラム」から



小松教育長(左)と語り合う本校生徒(右)

1/15（火）に開催されたフォーラムに、生徒会本部役員6名と放送部2名が出席した。

全員参加グループディスカッションでは、同じテーマを掲げる人がグループをつくり対話を行う取組において、本校生徒会副会長が小松教育長と同じグループになり、「学校を変える」というテーマで熱く語り合った。

参加した生徒からは、「声をかけてもらうのを待つのではなく、自分で企画を作ろうと考えた。なぜなら、様々な方からいろいろ意見を聞き、自分の価値観が変わったから。」「自分の伝えたいことを皆に知ってもらうには、興味を持ってもらうことが大切だ。なぜなら、好きになると没頭できるから。」などの感想が寄せられた。

4 課題と今後の展望

(1) 第1の柱「継続・コミット」

第1の柱「継続・コミット」は、芸術系の部活動の取組としてルーティン化されつつある。今後は取り組み姿勢を参加型から企画・運営型へとコミットの強化・進化を図りたい。

(2) 第2の柱「創造・チャレンジ」。

第2の柱「創造・チャレンジ」は、まだ緒に就いたばかりの取組である。

前述のとおり、吉川美南駅東口の開発については、高校生によるアイデア創出会議（10/23・火）を行った。今後はそこで出されたアイデアのさらなるブラッシュアップを図るとともに、「吉川美南駅東口周辺地区土地地区画整理事業」担当課とも連携を図りながら、同課主催「吉川美南駅東口周辺地区近隣公園ワークショップ」（2月～6月の計5回、吉川市在住・在勤・在学の方約25名参加）へ本校生徒に参加してもらう予定である。

また、本取組を「総合的な探究の時間」の教材として利活用する研究を進めたい。

平成30年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

県立越谷西特別支援学校

テーマ ICTでつなぐ地域きずなプロジェクト

1 教育効果・目的等

知的障害のある本校の生徒にとって、パソコンがより簡易に操作でき、仕上がりの差異が少なくなるようなソフトの開発・活用をした取組である。本校の生徒用パソコンには、ワープロ機能のあるものが入っていない。また、市販のソフトでは入力や操作が難しいということがある。このソフトの使用を通して、実際の取組の中で技術を身につけ、社会の中で役立つことを体験的に学ぶ機会となるように考えた。また、連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学にとっては、技術開発や社会貢献について学ぶ機会として取り組んだ。

体の動きを学習するソフトは、楽しみながら学習を進める教材として活用すると共に、連携校でのソフトの開発・改良への情報提供の機会として取り組んだ。

2 実践内容

(1) ソフト開発に向けて

始めに、顔合わせを兼ねたプロジェクトの趣旨確認を行った。開発・改良にあたり、プロジェクトの担当教員以外の声を仕様に取り入れた。連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学は、本校の機材や環境などを考慮して開発・改良に取り組んだ。



〔機材の状況確認〕



〔打ち合わせと仕様の確認〕

(2) ラベル作成ソフト

文化祭の製品頒布で使用するラベルシールや商品ポップを作成するためのソフトである。これまでは、1つずつ手作業で小さなものから大きなものまで作成していたが、作成数も多く準備に時間がかかり製品の作成に集中する時間が少なくなっていた。その解決を図る仕様とした。試作品は、本校のパソコンでの動作確認や調整を綿密に行った。本校の環境と開発する連携校の環境との違いが大きく、作成は大変な苦労がありかなりの時間をかけて調整していただいた。

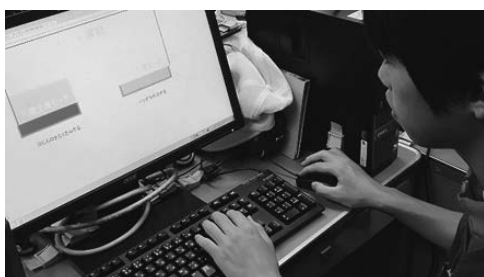


〔シンプルでわかりやすいデザイン〕



〔出力位置の調整〕

ソフトは、生徒が使い方をすぐに覚えられた。一人で扱うことができる生徒も多く、注文に応じて画像を探すなどして、自分でデザインを考えオリジナリティあるものを作ることができ、一人一人が達成感を味わえた。注文をした側からも仕上がりに満足し、取り組みやすかったという声が出された。



〔作成の様子〕



〔納品の様子〕



〔活用の様子〕



(3) 名刺作成ソフト

トレーニングモードでタイピング練習もできる仕様のため、パソコンを使った作業学習を続けることができている。



〔作成の様子〕

〔名刺の完成品例〕

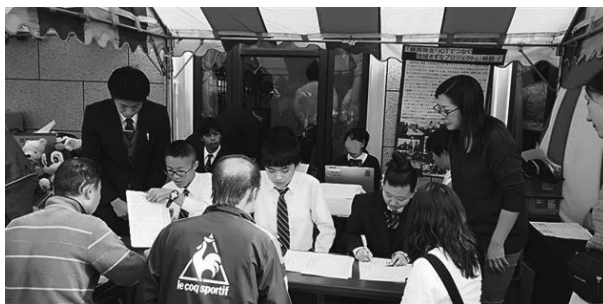


このソフトを使用して、地域での「名刺作成サービス」の出店を行った。社会の中で、接遇、作成、納品まで生徒が分担して取り組み、良い経験ができた。出店時には、全校で協力して生徒の支援にあたった。

〔越谷総合技術高等学校の文化祭への出店の様子〕



〔越谷市民まつりへの出店の様子〕



〔県庁オープンデーへの出店の様子〕



(4) フィジカルトレーニングシステムソフト

体の動きの学習システムとして、日本工業大学から機器やソフトをお借りして取り組んでいる。動かす部位を任意に設定できるので、取り組みたい動きや取り組む人の課題に合わせて調整ができる。また、理学療法士から助言をいただき、システム内で評価ができるよう機能やモードを追加する等を進めている。

さらに、このシステムは本校の作業学習の外部活動において、老人ホームの利用者様とのコミュニケーションツールとして、レクリエーション活動での利用も進めている。



〔改良にむけての検証の様子〕



〔取組画面例〕

〔取組の様子〕



Kinect センサー
このカメラで動きを
キャッチします

(5) フォーラムの様子

本校で作成した名刺を使用し、名刺交換会が行われたことで、自分たちが携わったものがどのように活用されるのかを体感する機会にもなった。同年代の生徒と接する機会をもてたことも良い経験となった。



〔名刺交換会の様子〕



3 実践の成果

違う視点からの教材提供が、子供たちの活動や取組の幅を広げることになった。また、地域や同年代と交流することができ、互いの理解を深めることもできた。本校の生徒は、自分の力で名刺を作成することができ、自信が持てるようになった。名刺作成は、地域から御注文をいただき、さらに経験の幅が広がっている。また、連携校である越谷総合技術高等学校と日本工業大学にとっては、ソフトの開発、試用、改善をとおしてスキル向上や社会のニーズに応えるという経験につながられた。

なお、このつながりをきっかけに、日本工業大学の他研究室との連携も始めることになった。

4 課題と今後の展望

名刺作成やラベル作成のソフトは、本校に現在ある機材で調整をしているため、今後その機材の故障や変更がある場合には、その都度の調整が必要となる。そのため、連携校において、担当者が異動になっても継続してサポートいただけるように、人とのつながりを大切にしていく必要がある。

